

# 大学雑感

都留文科大学生相談室 佐野善一

三回にわたって広報に連載された学長先生の「都留文科大学の今とこれから」を、共感をもって読ませていただきました。そして、市民として、また、大学の仕事に携わる一人として、切実な思いで受け止めました。

秋空の下、キャンパスには軽快な足どりの、カラフルな若者達の姿が見られます。一見、軽やかでのびのびと屈託なく見えるその姿も、学生の心の奥底に触れる機会が多い学生相談室の一角から見ますと、さまざまな苦悩を背負い、それと戦い、必死に生きる若者の、別の姿が見えてきます。

学生相談室で、学生から受ける相談の数は、年間二百数十件になります。ここでは、学生の求める情報の収集から、悩みごとや問題の解決まで、さまざまな援助を行っています。問題の質によって、教員や担当職員の協力を得て、総力で当たらなければならないものもありますが、いつも心に通うのは、挫折することなく無事に学業を全うしてほしいという願いです。そして、この地を選んだことが、幸せの道につながることに気づいてほしいと思います。ご承知のように、全学二千数百人の学生

の多くが県外出身の方々で、故郷を離れて下宿生活を送っています。市民の心が暖かく彼等を包み、この地で送った四年間が、よい思い出として心に残るようであってほしいと願うものです。

しかし、学生から受ける相談の中には、およそ善意と裏腹の、支えのない、学生の弱みにつけ入ったような問題もない訳ではありません。

思いおこすのは、人伝に聞く、ハイデルベルク大学やハーバード大学、そして、(大学の名前を失念しましたが)アメリカの或る小さな大学などが置かれている都市の空気です。学びたいのは、これ等の都市が、大学を愛するという伝統の中で、大学を育て、大学を支え、大学の町としての環境を整え、文化的施設を設け、誇りある大学の町として発展してきたことです。都留市もまた、名実具えた、住み心地のよい風格ある学園都市であってほしいと願うものです。夏休みに入って、閑散とした構内を、子供連れで歩くご夫妻に出会いました。以前に卒業した者だが出が、当時、世話になったという下宿のおばさんのことなど

を懐しげに話してくれました。

それにつけて思い出されるのは、「ホームカミングデー」の記念行事を催している大学のあることです。卒業二十五年の節目に当たるOBを、毎年、大学が招待し、交歓する催しです。町のホテルも、劇場も、商店も居酒屋も、この日は、特別価格でオールドボーイ達を歓迎します。この催しには、大学と卒業生の絆を強固にして大学の基盤を確かなものにし、今後の発展をはかろうとする遠大な志がうかがわれますが、地域にとっても波及的な効果が少なくないと思えます。全国に広がるOB達の子供もまた孫も、父母や祖父母の第

二の故郷として、この地を愛し、この地につながりを持つようになるでしょうし、大学のあるこの町の特徴が、OBを通して全国に知られ、有形、無形の効果を生んで戻ってくるのが考えられます。

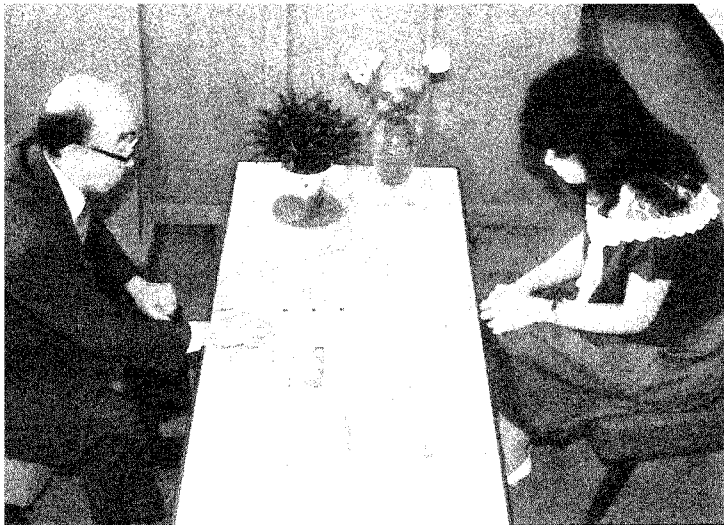
教員養成大学として輝かしい歴史をもつ本学も、児童、生徒数の減少という事態に直面して、教職以外の、新たな市場の開拓を迫られています。企業実績に歴史の浅い本学は、今、教員と職員が一体となって企業訪問なども行い開拓の努力をしています。先に述べたような催しが行われるようになれば、全国に広がるOBの支援を得て、差し迫った就職問題にも新

たな展開が見られるのではないかと思います。よい就職市場をもつ大学は、「魅力ある存在」の一つであることに間違いありません。

先年、新潟大学で開かれた、ある会議に出席する機会を得ましたが、驚いたのは、教育系国公立大学の、「存立の危機」を唱える声さえもです。そして、生き残りをかけて、内容の充実はもとより、事務局態勢、施設、設備、環境、学生食堂に至るまで、充実、改善を図るという目論見を述べていました。

いつものように今朝も、交差点の角を折れて出勤してきましたが、この日も、電柱の蔭に、花束とジュースの罐がひっそりと置かれています。ここは、何年前か、女子学生が交通事故で亡くなった所です。学業半ばにして、若い命を、異郷に散らした無念さは思うに余りあります。

都留市は、全国から集う二千数百人の若者を預かり、育てています。この人達の、かけがえのない青春を、町ぐるみで大切にしたいものと思います。同時に、小さいながらも特色のある魅力的な大学を創るための展望を持ち、一層の充実をはかることが大切だと思います。このことが、ひいては都留市の発展につながるものと考えています。



学生相談室